

はじめに

19歳で都立戸山高校から、東京大学理科一類と慶應義塾大学医学部に合格し、親戚からは私のような母子家庭の貧しい家庭では私立の医学部に進学するのは無理だから、東京大学に進学するように勧められました。

慶應義塾大学医学部の二次試験の面接でも「学費は誰が払うの？」と聞かれました。「わかりません」と答えて、帰宅してから正積兄に話したら、「バカかお前、親戚にお金持ちがいるって嘘をつけばよかつたのに、それじゃ受からないよ」と怒られてがっかりしていました。

しかし40倍の倍率の入学試験での正規合格でしたので、私のごとく貧しい母子家庭の受験生を合格させた、慶應義塾大学医学部の寛大さには感謝しています。

慶應義塾大学医学部に合格したことを正積兄に報告しましたら、「東大に行って官僚なんかになったら、お前はどうぞ碌ろくなことをしないから、医学部へ行け」と言われました。父親が東京大学を落ちて、普通高校の校長になれず、両親揃そろって東京大学にコンプレックスを持っていましたので、母親は私が

東京大学に進学して学校の先生になることを望んでいました。そのことを正積兄に言いましたら、「お袋は何もわからないから、医学部を卒業したら学校の先生になることにすればいいよ」と、言いました。そんなに単純かな、と思いました。母親はあっさりと言いました。正積兄に説得されてしまいました。

ただ慶應義塾大学医学部の学費がこの当時では非常に高く、年間65万円でしたので、どのようにして学費を払うかが心配でした。

この当時、慶應義塾大学医学部では家庭教師が厳に禁止されていましたので、週刊誌の代筆などをしてお金を稼ぎました。学年主任の田口教授が、「君たちは家庭教師をすればタレント級だろうが、そんな暇があったら勉強しなさい。第一、カリキュラムが厳しくてアルバイトする暇はないよ」と言われま

した。

19歳から出版社とのお付き合いがはじまりましたが、実名、ペンネームなどの本や、雑誌の記事など100以上になります。初めて原稿を書いたのは、大学受験のための旺文社の参考書、週刊誌の代筆、医学教育出版社の医学生向けの参考書、TECOMの医学生向けの参考書などがあります。

実名を初めて出した本は、草思社の『生死を分ける医者選び』です。ただこの本を書いた後はセミナー、テレビ出演、新聞社の取材などがあり、医者としての仕事がほとんどできなくなりましたので、

その後はペンネームで本や雑誌の記事などを書いていきます。

今回、GalaxyBooks株式会社の川西さんから執筆依頼があり、この出版社は真面目で、目的がお金ばかりではなく、書籍の出版に対する理念も少しはあるようでしたので、原稿依頼を引き受けました。

この本には23歳、24歳のときのヨーロッパ、アメリカ旅行のことが書かれています。

私が文章を書くようになったのは、慶應義塾大学医学部の学費を稼ぐのが当初の目的でしたが、文章を書くことによって知見が広がり、教養が深まったと思います。

人にはそれぞれ才能がありますが、才能だけでは何事も成功しません。

「好きこそもの上手なれ」といわれるように、まず好きでなければ何も成し遂げられません。

1978年の大学4年生のときにヨーロッパ旅行をしようと決心いたしました。

友人に紹介された日本橋にある小料理屋のマスターの橘さんと気が合い、旅行の話聞きにきました。橘さんはスペインが特に好きで、お店にはスペインのお土産がたくさん飾ってありました。その話を聞いて、私もスペインに憧れるようになりました。1カ月間のヨーロッパ旅行を予定していましたが、スペインを中心に旅行を組み立てることにしました。

23歳の大学4年生の夏にヨーロッパ旅行をして、海外旅行に魅せられましたので、24歳の大学5年生の夏はアメリカ旅行をすることにしました。